

〈通盛〉前場のシテ・ツレ登場段をめぐって

YAMANAKA, Reiko / 山中, 玲子

(出版者 / Publisher)

The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University /
法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 = Journal of the Institute of Nogaku Studies : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

42

(開始ページ / Start Page)

95

(終了ページ / End Page)

103

(発行年 / Year)

2018-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014433>

【研究ノート】

〈通盛〉前場のシテ・ツレ登場段をめぐって

山中 玲子

はじめに

古作の修羅能〈通盛〉については、『申楽談儀』16条に「井阿作」と明言される一方、同書14条「道盛、コトバ多きを、切り除け切り除けて能になす」から、世阿弥の手が入っていることが知られている。「能になす」という口ぶりは、それ以前は能になっていなかったという世阿弥の評価を感じさせるが、同じく14条の「祝言の外には、井筒・道盛など、直成能也」「道盛・忠度・よし常、三番、修羅がかりにはよき能也」等を見れば、改訂後の〈通盛〉の方は世阿弥自身が非常に高く評価していたこともまた明らかである。本曲の中に見られる古作らしさや、井阿弥作の他曲と共通する特徴、世阿弥がどのように手を入れた可能性があるか等については、すでに、徐禎完『「通盛」論―その変容に関する一試論―』（注1）、三宅晶子「井阿弥の作風―夢幻能以前―」（注2）において様々に言及されているが、本稿もまた、特に前場のシテ・ツレ登場段の詞章に注目して、いくつかの可能性を提示してみたい。時間・紙数ともに制約があり、とりあえず気づいたことを報告する「研究ノート」という体裁をとらせて頂く。

以下、〈通盛〉の詞章は日本古典文学大系『謡曲集上』所収本文（能楽研究所蔵「堀池識語本」が底本）に基づいている。ただし、読みやすさを優先して記号を省略するなどの変更は加えている。

一 第2段と第3段の断絶

本曲前場は、阿波の鳴門に滞在するワキ僧（第1段）のもとに、浦の老人（シテ）と姥（ツレ）が小舟に乗って現れ（第2段）、ワキ僧の読経を受けて喜び（第3段）、ワキ僧の問いに答えてシテ・ツレが小宰相局の入水の場面を再現して消えていく（第4段）という内容である。だが、第2段と第3段の詞章を詳細に見ていくと、この両者、特に、第2段と第3段冒頭の「サシ」とのつながりは、いささか不自然に思われる。まず、2段の詞章を引く。

〔掛け合〕 ツレすは遠山寺の鐘の聲、この磯近く聞こえ候 シテ入相ごさめれ急が給へ ツレ程なく暮るる日の

影かな、シテきのふ過ぎ ツレけふと暮れ、シテあすまたかくこそあるべけれ、ツレされども老いに頼まぬは、

シテ・ツレ 身の行く末の日数なり

〔「一セイ」 シテ・ツレ いつまで世をばわだづみの、あまりに隙も波小舟。 ツレ なにを頼みに老いの身の、シテ命

のために使ふべき。

〔上ゲ哥〕 地 憂きながら、心のすこし慰むは、心のすこし慰むは、月の出潮の海人小舟、さも面白き浦の気色かな。所は夕波の、鳴門の沖に雲続く、淡路の鳥や離れ江の、憂き世の業ぞ悲しき、憂き世の業ぞ悲しき。

〔掛け合〕では、二人の登場人物が山寺の鐘の音を聞いている。入相で急ぐのは帰宅を急ぐ台詞にも聞こえる。もち

ろん、後で明らかになるように、夜に経を聴聞しようと思っているから急いでいるのではあろうが、それが判らない段階では、入相の鐘を聞いて帰宅を急ぐ二人の人物の対話と理解できる文言である。また、「掛け合」の後半と「一セイ」には「老いの嘆き」（傍線部）も謡われ、急ぐ心は余命の短さとも結びついていることがわかる。ただし「老い」という言葉自体はツレ（姥）の謡う部分にしかない点、心に留めておきたい。続く「上ゲ哥」では、辛い境遇の身を慰めるものとして、月が昇り満ちてくる潮に乗って船出した沖から眺める、秋の浦の景色が描かれ、だが結局はそうして沖に出ることも海人としての辛い生業であると結ばれる（傍線部）。老いの嘆きはもちろん、海人としての重労働の辛さも、たとえば〈松風〉の前場と同じ人間の嘆きと言える。夢幻能の前シテは幽霊の「化身」なので、〈鵜〉の前シテのような例外をのぞき、普通の人間の姿で、人間の心を持ち、労働の辛さや無常の世に生きることのむなしさを嘆いたり風景を愛でたりしながら登場してくる。いきなり奈落の底から呻きつつ登場するわけではない。その原則に、右の2段「掛け合」「一セイ」「上ゲ哥」の内容は合っている。だが、3段「サシ」は、様子が違う。

〔サシ〕^a シテ 暗濤月を埋んで清光なし、ツレ 舟に焚く海人の篝火更け過ぎて、シテ・ツレ 苦よりくぐる夜の雨の、
 芦間に通ふ風ならでは、音するものも波枕に、夢か現かお経の声の、風に連れて聞こゆるぞや、^b 梶音を静め唐櫓
 を抑へて、聴聞せばやと思ひ候。

ここでは、暗い波が月を隠している（傍線^a）。夕暮れに出ていた月がすでに波間に沈んだ深夜ということなのかもしれないが、それだけでなく、雨が降り、風も吹いており、その嵐の音に混ざってお経の声がするという（傍線^b）。ここで「聞こゆるぞや」と言っているのは、誰なのか。さきほど、夕暮れの鐘を聞き、憂き世の業を嘆く会話を交わし

ながらいそいそと現れた二人なのだとしたら、彼らは今までどこで何をしていたのか。僧は夕暮れから磯辺で経を讀んでいるのである。むしろこれは、先ほどの二人とは別の人物が別のところから、しばらく時間が経った後に、別の事情を抱えて現れたと考えるほうが自然ではなからうか。現行演出ではシテ・ツレの登場段と、それに続くワキとの応対の段として処理されているが、実は、第2段と第3段の間には大きな断絶が見られるのである。

また、傍線が描く状況も、月もなく雨音と風の音だけがする暗い海で漁をしている、ということではないだろう。この後の場面を見ても、暴風雨の中でワキ僧とシテ・ツレが会話をしているとは見えない。現実には嵐ではなく、ここに現れ出てくる誰かの世界がそのような環境だということではないか。暗くて嵐の音しかないあの世から、かすかに聞こえる経の声を便りに誰かがやってくる、という状況を考えてみたい。ちょうど、〈葵上〉の前シテである六条御息所の生き霊が「梓の弓の音はいづくぞ」とつぶやきながらあの世から現れてくるような形である。とすると、これが、通盛の霊の登場なのではないか。すなわち、第2段では小宰相の霊の化身である姥が、もう一人の人物を伴い登場して「掛ケ合」「二セイ」を謡い、それとはまったく別個に通盛の霊は第3段で登場してくるという設定だったのではないだろうか。この場合、小宰相が連れてくるのは言うまでもなく、本説たる『平家物語』でも最後まで連れ添った乳母(の霊)ということになろう。

2段「掛ケ合」冒頭の「すは遠山寺の鐘の聲、この磯近く聞こえ候」をまずツレの姥から謡いだしシテがそれを受けて「入相ごさめれ急が給へ」と続ける現行の役分担は、通常のシテ・ツレの「掛ケ合」とは逆で不自然だが、ここが本来小宰相と彼女に従う乳母の登場段であったとすれば、まず姥(小宰相)が謡いだし、乳母が続けるのはごく自然な形といえる。姥と乳母のコンビなら、姥だけが老いに言及するのもまた当然だろう。

二 前場の再検討

前項で想定したごとく、2段と3段の間に断絶(時間的経過)があり、前場の登場人物が、小宰相の霊の化身である姥、乳母(の霊)、通盛の霊の化身である老人の三人であつた場合、前場の詞章解釈やそこから思い描かれる情景も変わることになる。

まず、先に掲げた3段「サシ」のうち二重傍線を引いた「舟に焚く海人の篝火更け過ぎて」は、どの舟のことを言っているのか。現行演出ではシテと同じ舟に乗るツレ姥の謡だが、これを3段で新たに登場した(と本稿で推定する)通盛が言うのか、それともすでに宵のうちにこの磯辺までたどり着いている姥が自分たちの船について言っているのか。当然ながら、本稿の推定では、姥たち(小宰相と乳母)が乗って出てきた舟の篝火ということになる。そして、その推定は、続く「掛ケ合」の内容とも響き合う。

〔掛ケ合〕
ワキ 誰そやこの鳴門の沖に音するは シテ 泊り定めぬ海人の釣り舟候ふよ ワキ さもあらば思ふ子細あり、この磯近く寄せ給へ シテ 仰せに従ひさし寄せ見れば、
ワキ 二人の僧は巖の上、
シテ 漁りの舟は岸の蔭、
ワキ 葦火の影をかりそめに、お経を開き読誦する シテ 有難や漁りする、業は葦火と思ひしに、
ワキ 善きともし火に鳴門の海の、
ワキ・シテ 弘誓真如海歴劫不思議の機縁によりて、五十展転随喜功德品^d

右の二重傍線部でワキ僧は、沖から聞こえる楫音に反応している。もしもシテの舟に篝火が燃えているのなら、その火が沖にあるうちから見えることだろう。暗闇の中から現れたシテの舟に篝火はなく、ただ楫音だけが聞こえるから

こそ、ワキ僧はどのように尋ねていると考えられる。この点からも、「サシ」にある「海人の篝火」はツレたちの舟のもので、「更け過ぎて」に無理に「舟の篝火の勢いが弱まった」という意味を含ませなくてもよいのではないか（注3）。篝火の燃える夜更けであり、第2段の登場段から時間が経過していることを、当事者のツレの言葉で示していると見るべきと思う。

また、シテの「仰せに従ひさし寄せ見れば」以下は、現行では、ワキ僧とシテがそれぞれ自分の位置や動作を謡うと解されるが、そうではなく、まさにシテが「さし寄せ見」た情景と考えることもできる。「漁りの舟は岸の蔭」（傍線c）は、先に寄せていた小宰相たちの舟のことを指し、その篝火を頼りに為される読経によって姥たちが救われることにより、直接には僧と関わってない（もしかしたら僧の目にもよく見えていない）老人（通盛の霊）も救われるのが、「五十展轉随喜功德」（傍線d）の証でもあるのではないか。「五十展轉…」本来の、五十人が言い伝えていった先でも功德があるという意味とは少しずれてはいるが、それでも、夫婦の霊が二人一緒に舟に乗って僧の読経の功德一度に受けている現行演出よりは、言葉の意味が活かされていると思われる。

このように考えると、3段末「上ゲ哥」の「童女變成と聞くときは、姥も頼もしや、おほぢは言ふに及ばず」も理解しやすい。シテ老人とツレ姥がともに現れ、僧の読経を受けて喜ぶ場面で、なぜ先にツレの姥が喜び、シテの老人のことは付け足しのように言うのか、法華経の功德が女性にも及ぶことはたしかだが、それだけではこの不思議な順番は説明できない。だが、あくまで僧と直接向き合っているのは姥たちで、通盛の霊はそのそばに来ているという状況なら、姥の側からの発言としてこの順序も「もちろん…」というニュアンスで付け加える言い方もふさわしいものとなるう。

三 中入りの処理——世阿弥による改定との関係など

前項のような推定は、当然ながら第4段の解釈にも変更を迫ることになる。周知のとおり、『平家物語』によれば阿波の海で死んだのは小宰相の局一人である。4段でその小宰相の最期を、その場にいもしなかった通盛の霊（の化身である老人）が一緒に語る不自然さは一読して明らかで、本稿冒頭に挙げた徐稿や三宅稿でもその点に言及されている。「クドキ」の「さるほどに小宰相の局めのとを近づけ」という文言や、「上ゲ哥」の「めのと泣く泣く取り付きて：」以下で語られる乳母の台詞と引き止める動作の描写からは、ここに乳母が登場して姥とともに小宰相の入水の場面を再現するほうが、自然なのである。

一方、前場の終わりには「：振り切り海に入ると見て、老人も同じ満ち潮の、底の水屑となりにけり」という謡があり、ツレの姥が入水すると同時にシテの老人も海に跳び込むことになっている。従来のように前場の登場人物は二人であるとの前提で、通盛の霊の代わりに乳母が登場していた可能性を考える場合、小宰相の身投げと同時に、乳母も身を投げたというのは老人と一緒に飛び込むのと同様、おかしい演出となろう。本説では後まで生きたはずの乳母が小宰相の霊と一緒に入水してしまうよりは、ほぼ同時期に戦死した通盛が妻の霊と行動を共にする方が、筋は通っているとも言える。だが、本稿での推定のように、そもそも二人ではなく三人が登場していたと考えれば、ワキ僧の要望にこたえ、小宰相の霊（の化身である姥）が自身の入水の場面を語り始めたところで「や、もろともにおん物語り候へ」と乳母を誘い、二人で場面を再現した後、入水の場面で消え、同時に、そばに浮かんでいた老人の霊も消えていく、という状況を考えることができる。乳母の霊の化身が舟に残っている、そのまま消えたことにするのだろうか。それは舞台演出上の処理にかかわること、大きな問題ではあるまい。ただし、当該部分の謡は後に老人・姥の二人

が同じ舟で現れて消える演出に合わせて改定された結果である可能性もあり、三人がどう消えていたかは、よく判らない。右は、このような説明も可能、という一例である。

以上、現行演出とは違う〈通盛〉の古形を想定してきた。具体的には、前場には通盛の霊の化身である老人、小宰相の霊の化身である姥、小宰相に従っていた乳母の霊、の三人が登場していたと思われること、小宰相と乳母が同じ舟で小宰相の死んだ場所に現れ、僧と積極的にかかわるのも彼女たちであること、通盛の霊は小宰相との縁を頼って地獄（修羅道）からうかびあがってくることを想定したが、ここまであえて避けて通ってきた問題がある。それは、このように想定した古い〈通盛〉が現行のような形に変わったのはいつか、という問題である。別の言い方をすれば、三人登場する〈通盛〉は、世阿弥が「切り除け切り除けして能になす」前の井阿弥時代だけのものなのか、それとも世阿弥改作後もしくは三人が登場しており、ツレの姥が若い女に変わるのと同様の演出の変化の中で、乳母が省略され二人がひとつの舟に乗る現行演出のようになったのか、ということである。

この点については、まだ十分考察ができていないが、稿者は今、以上で推定した三人登場の形が世阿弥の改作後もしくは残っていたのではないかと考えている。世阿弥が詞章を大幅に「切り除け」ながら登場人物を減らしたのなら中入りの場面の処理など、もう少し辻褄の合う形にしたのではないかと思うからである。むしろ、〈葵上〉の青女房の例などと同様の、詞章との齟齬に配慮せずに行われた省略という印象がぬぐえない。一方、現在の第3段で通盛の霊と僧が応対する前に、井阿弥版〈通盛〉では僧と小宰相局たちとの会話などがあつたのではないかと想像している。世阿弥が切り除け整理した結果が、現在の2段と3段の断絶に現れているのかもしれない。以上、あくまで印象でしかないが、現段階の立場を記しておく。

なお、本稿で想定した、「先にツレの女がワキに会っているところに、後からシテの霊が現れてくる」という構造は、同じく古作の〈通小町〉や世阿弥自筆本〈雲林院〉とも共通するものである。本曲は『三道』でも修羅能の一群の中に挙げられており、安易に鬼能のパターンと並べてはいけなかもしれないが、終曲部ではシテについて「悪鬼心を和らげ」と描写していることも事実で、井阿弥版には鬼能的な要素も強かったかもしれない。本稿では〈通盛〉の後場についてはまったく触れていないが、この点も含め、今後、他の古作能と広く比較・考察していきたい。その過程で、世阿弥による改作と本稿での推定とが全体を通して矛盾をきたさないかどうかのより詳細な検討も進めることになる。

注

1 『筑波大学平家部会論集』1、一九八九年。

2 『日本文学史を読む Ⅲ 中世』（有精堂、一九九二年）、『歌舞能の確立と展開』（ぺりかん社、二〇〇一年）に収録。

3 古典文学大系の頭注は「火勢の弱まることと夜半を過ぎたことを兼ねる」とし、新潮日本古典集成も「燃える篝火が盛りを過ぎて火勢を弱めたこともかけるらしい」と解しているが、これらは篝火が通盛の乗る舟のものと前提だから必要な解釈で、本稿のように別の舟と考えれば、火勢が弱まる必要はない。